

2度の臓器移植により救われた女性。死の間際に懇願した「命のリレー」は、バトンの行き場を失った。

19年に臓器移植を希望した人のうち、実際に移植を受けられたのは、わずか3%。そんな中、臓器移植により得た命を、今度はドナーとしてつなぎたいと願いながら、叶えられないまま亡くなった女性がいた。彼女の死は、世界に大きく後れをとる日本が抱える臓器移植の問題を浮き彫りにしていた。

愛する妻が、いままさに死を迎えようとする病室に、夫の怒声が響き渡った。

「先生、あいつは志半ばで死ぬんです。その思いをつなげなくて、この先どうして移植医療が進むんですか！」

妻の臓器をどうにかして誰かに移植していかしてほしい。愛知県半田市在住の神原正秋さん(66才)は、こう訴えた。正秋さんの妻・悠子さん(享年38)は、若くして失明のハンデを負い、2度の臓器提供を受けた。体調悪化で死期が迫ったとき、夫は悠子さんの肝臓をレシピエント(臓器移植希望者)に譲って命をつなごうとしたが、マニユアルには生まれ、叶わなかった。

少ない家具が整然と置かれる自宅で、悠子さんの遺影を前にした正秋さんが語る。「悠子は障害を抱えていてもこちらが驚くほど前向きで、

いつも困っている人の役に立ちたいと願う女性でした。人から大切な臓器をもらったのだから、命のバトンをつないでいくべきなのに、ほくは彼女が亡くなるたびに何もできなかったことが悔しくてしかなかった。だからこそ、現在の移植医療を変えたいのです」(正秋さん、以下同)

今度自分が誰かの役に立ちたいと望みながら、志半ばでこの世を去った悠子さん。最愛の伴侶を失った正秋さんが語る、日本の移植医療の高くて厚い壁とは――

医療の限界 リアルレポート

脳死判定の壁がはばむ 私の臓器を誰かに

あげたかかったのに

当時、福岡県北九州市で会社員だった正秋さんが、友人の紹介で悠子さんと初めて出会ったのは02年。

3才から患う1型糖尿病により視力を失うという不運に

見舞われながらも、終始前向きな姿に、正秋さんは驚きを禁じ得なかった。

「何か失敗しても、泣きながらまた挑戦するような女性でした。初対面のときからとても明るくて元気で、目が見えないと聞いても、信じられないほど、ちよとほくが仕事で落ち込んでいた時期だったので、これまで出会った誰よりも前向きで、話しているうちに励まされた思いがしました。と同時に、これはすごい人だ」と、生き方に感銘すら覚えました。

その後、正秋さんは実家のある半田市に戻って家業を継ぎ、悠子さんは京都の大学に進学した。離れ離れになったふたりだが、07年に悠子さんから電話があった。

「私のこと覚えていますか?」嬉かしい声に、正秋さんはすぐに自家用車をとばして京都へと向かった。

「久しぶりにいろいろな話をしました。そのとき、腎機能も悪くなってきていると聞いて、障害を持った人のため少しでも役に立ちたいと語る彼女に、

「私にできることはありますか?」と尋ねた。正秋さんは「腎臓移植を希望しています」と話した。正秋さんは「腎臓移植を希望しています」と話した。

「腎臓移植を希望しています」と話した。



悠子さんが生前使っていた携帯電話には「亡くなる20日ほど前に正秋さんに送った。不安と無念さが刷られたメッセージが残されている。

「腎臓移植は成功し、3か月後に正秋さんと悠子さんは結婚。新婚が半田市に移り住んだ。慣れない土地に不安もあったが、4年ほどひとりで暮らしを継続してきた悠子さんに、大きな不自由はなかった。ただ、1型糖尿病のため、起きていたときはもちろん、就寝中に低血糖を発症

したら、すぐにブドウ糖を与える必要がありました。命にかかわるため、緊急時に備えて夜は必ず妻に添い寝して、熟睡することはありませんでした」

二人三脚で新婚生活を送る夫婦には、「子供をもつ」という共通の夢があった。主治医に相談すると、糖尿病を抱えたままの妊娠や出産育児は多くのリスクを伴うため、臓器を移植して糖尿病を抑えることをすすめられた。出産を望む悠子さんは速うことなく臓器移植を希望する「日本臓器移植ネットワーク」に登録した。すると幸運なことに、1年も経たないうちにドナーが現れ、14年3月

「臓器移植後の4年あまりは、本当に穏やかで幸せな日々でした」

当時を正秋さんが振り返る。臓器移植により、インスリン注射や食事制限から解放され、ふたりはおいしいものを食べ歩いた。飛騨高山の温泉や浜松を旅行し、関門海峡花火大会を一緒に見た。

特にうれしかったのは、平穏な取りが手に入ったことだ。「それまでは低血糖が怖くてお互いに熟睡はできませんでした。でも臓器をいたいたことで低血糖の不安がなくなり、夜は夫婦別々の場所ですぐすりと眠れるようになった。世の夫婦は仲が悪くなる」と別々に眠るのかもしれないが、ほくらは離れて眠れるようになったことが、何よりも幸せでした。

だが18年の終わり頃から悠子さんの腎機能がまたも落ち始め、腸閉塞の発症や食欲不振などが続く。腎臓移植を望んで日本臓器移植ネットワークに登録すると、担当者から腎臓は待機時間が10年以上かかる

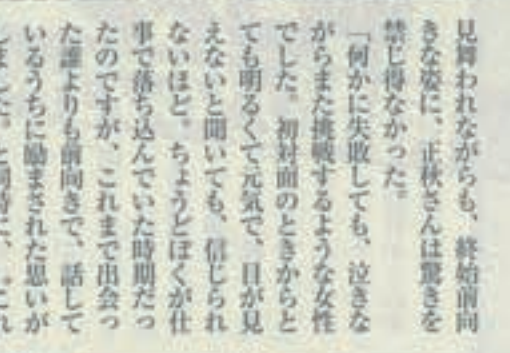
見舞われながらも、終始前向きな姿に、正秋さんは驚きを禁じ得なかった。

「何か失敗しても、泣きながらまた挑戦するような女性でした。初対面のときからとても明るくて元気で、目が見えないと聞いても、信じられないほど、ちよとほくが仕事で落ち込んでいた時期だったので、これまで出会った誰よりも前向きで、話しているうちに励まされた思いがしました。と同時に、これはすごい人だ」と、生き方に感銘すら覚えました。

その後、正秋さんは実家のある半田市に戻って家業を継ぎ、悠子さんは京都の大学に進学した。離れ離れになったふたりだが、07年に悠子さんから電話があった。

「私のこと覚えていますか?」嬉かしい声に、正秋さんはすぐに自家用車をとばして京都へと向かった。

「久しぶりにいろいろな話をしました。そのとき、腎機能も悪くなってきていると聞いて、障害を持った人のため少しでも役に立ちたいと語る彼女に、



「前向きだった悠子さんを尊敬していた」と語る正秋さん(下)。ふたりが7年を過ごした部屋には、遺影とお骨が置かれていた。



さんの両親がどう言うか――「会わせたい人がいる」と両親に告げながらも、悠子さんの体調について説明したのは、顔合わせの直前だった。だが、すべては記念に終わった。「あの子ならいいんじゃない」

母親はこう言ってくれた。「あなたみたいに30を過ぎたのと結婚してくれるっていうんだから、ありがたいじゃないの」と、祝福してくれたのだ。父親も、苦勞するかもしれないが、覚悟ができてくるのなら、認めてくれた。

だがこの頃、腎臓は人工透析が視野に入るほど悪くなっていた。すると悠子さんの父親が、嫌々なら透析をしない生活を送ってほしいと、腎臓の提供を申し出てくれた。そして12年8月、父親間で腎臓の生体移植を行った。

「腎臓の悪化と貧血が止まらず、悠子さんはみるみるやせ細っていく。19年7月に入院すると体重が30kgを下回り、「つらい」「死にそう」とのメールが仕事時の正秋さんの元に何度も届いた。

その直後、移植した臓器が拒否反応を示して全身の状態が急激に悪化した。ICUに運ばれるとき、正秋さんが悠子さんに声をかけた。「絶対戻って来いよ。待つとるでな」

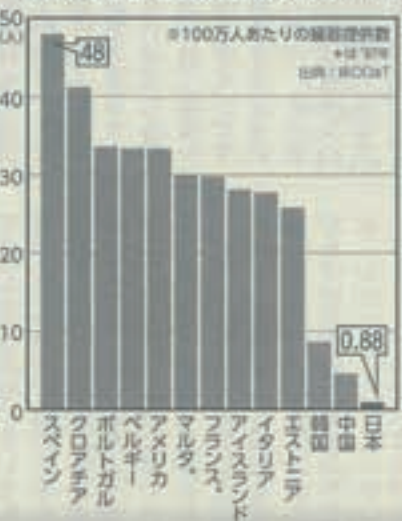
悠子さんは小さくうなずいた。それが夫婦の最後の会話となった。悠子さんは脳出血を起こして、二度と目を覚ますことはなかった。

「私が受け取った優しさを、命を、リレーしたい」

「人生で初めて、頭が真っ白になって、本当に何も考えられ

日本の臓器提供数は世界と大きな隔たりが

人口比で見ると、日本の臓器提供数は第1位のスペインのわずか50分の1に過ぎず、韓国、中国や中国と比べても大きな後れをとっている。



腎臓の悪化と貧血が止まらず、悠子さんはみるみるやせ細っていく。19年7月に入院すると体重が30kgを下回り、「つらい」「死にそう」とのメールが仕事時の正秋さんの元に何度も届いた。

その直後、移植した臓器が拒否反応を示して全身の状態が急激に悪化した。ICUに運ばれるとき、正秋さんが悠子さんに声をかけた。「絶対戻って来いよ。待つとるでな」

悠子さんは小さくうなずいた。それが夫婦の最後の会話となった。悠子さんは脳出血を起こして、二度と目を覚ますことはなかった。

「私が受け取った優しさを、命を、リレーしたい」

「人生で初めて、頭が真っ白になって、本当に何も考えられ

「臓器移植を希望しています」と話した。

新時旅行では食事を用意していたが、脳移植後は自らの力によるものとなく、生まれて初めて食べた肉の存在に食べられるようになった。



てだった。すぐ肝移植を準備してほしいと望む正秋さんに、医師はこう続けた。

「実は瞳孔の問題があり、脳死判定ができないんです」

脳死とは、脳の全機能が失われて決して元へは戻らない状態をいう。どんな治療をしても回復することはなく、やがて心停止にいたる。

日本では、死後の臓器提供を行う場合、臓器移植法に基づいた脳死判定が求められる。その判定要件の1つが、瞳孔に光を当てて反応を調べる「対光反射」だ。脳死判定の手順を示した「法的脳死判定マニュアル」には、眼球や角膜の高度損傷や欠損がある場合、「当面の間は法的脳死判定を行わない」と記載されている。失明した悠子さんは瞳孔が機能せず、臓器移植をする際のマニュアルに定められた脳

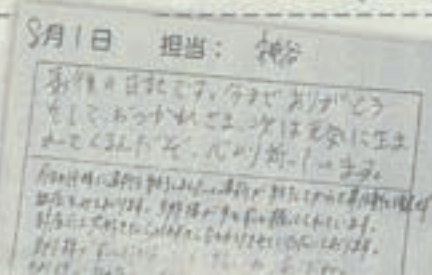
死判定が行えないため、臓器を移植できない——こうした説明が主治医から告げられた。正秋さんには到底受け入れられるものではなかった。

「たとえ失明していてもほかの方法で脳死判定ができるはず。最初から失明者を除外するような規則は、あつてはならない。何度も食い下がりましたし、病院側も厚生労働省などに掛け合ってくれたのですが、移植は実現しませんでした」

自らの臓器を人に譲る望みは叶わず、緊急搬送されてから3週間後の19年8月1日、悠子さんの心臓は停止した。「いままでよく頑張った」。正秋さんは涙ながらに妻を見送るしかなかった。

日本の臓器移植は欧米に30年遅れている

日本の臓器移植は世界に後れをとっている。97年に臓器移植法が施行されたが、人口100万人あたりの臓器提供数(18年は、スペインの年間48人に対して、日本は0.88人、50分の1程度に過ぎない。臓器移植による健康回復を望み、日本臓器移植ネットワークに登録して待機する人は約1万4037人だが、死後の提供で移植を受けられる人は、眼球をのぞくと年480人と、3%しかない。日本で臓器移植が進まない



悠子さんの心臓が停止した19年8月1日の経過観察の記録。「今までありがとう。そしておつかれさま。次は元気に生まれてくるんだぞ」と正秋さんは妻を感謝とエールで見送った。

られる移植技術を持つ日本だからこそ、ルールを見直しして臓器を移植しやすくするべきです」(正秋さん)

好きなものを食べるだけ食べ、ただぐっすり眠るだけ——わずか4年という歳月だったが、そうしたささやかな日常を感しんだからこそ、臓器移植の法整備の必要性を切実に感じているといっている。

「たとえ対光反射ができなくても、脳の血流を調べるなど別の方法で総合的に脳死診断することは可能なはず。現状のルールでは白内障が悪化した患者や交通事故などで眼球を損傷した患者も脳死と診断できず、臓器移植の推進の妨げとなっています」

国の移植医療を司る厚生労働省はこう考えているのだろうか。「目のほか、耳の障害でも脳死判定ができないのではないかとこの意見もあります。ですが、脳死判定のやり方を見直すことは、死の基準を見直すことにつながり、慎重な医学的議論が必要です。現時点では、医療従事者や学会などから脳死判定の見直しの具体的な意見は聞いておらず、見直しに向けた動きはありません」

法的脳死判定の項目(検査方法)

手順	項目	検査方法
1	深い昏睡	疼痛刺激を顔面に加える
2	瞳孔の固定	瞳孔を測定する
3	脳幹反射の消失	瞳孔に光を当てる。耳の中に冷たい水を入れる。喉の奥を刺激する。ほか
4	平坦な脳波	脳波を検出する
5	自発呼吸の消失	人工呼吸を停止して無呼吸を確認する
6		1~5の検査終了から6時間以上経過した後にもう一度検査を行い、総合評価する

現行の脳死判定では、ドナーの目や耳に障害がある場合、判定できない可能性がある。

ん」(同省・移植医療対策推進室の担当者)

悠子さんと出会い、正秋さんは数多くの視覚障害者と知り合い、ともに語り合うことも増えた。多くの人の思いを胸に、あらためてこう訴える。「視覚障害のかたがたは普段の生活で肩身の狭い思いをしながら、一方で、自分たちが世の中のために貢献したいと願っている。そうした人々が誰かの役に立つ権利を奪われるのは、どう考えても理不尽です。ルールを見直すことで移植医療が前進し、臓器を与える人と、受け取る人が少しでも幸せな日常生活を送ってほしい」

悠子さんが命をかけて夫の正秋さんに託したバトンを、今度は私たちがつないでいくべきがきた。